

グリム兄弟における理念としての「森」

大野 寿子

はじめに

ヤーコプ・グリムとアヒム・フォン・アルニムとの「自然的ポエジー」Naturpoesie と「人為的ポエジー」Kunstpoesie¹⁾をめぐる論争は有名である。双方を同時代的にとらえるアルニムに対し、ヤーコプは「自然的ポエジー」の先行性と優位性を主張する。1811年5月20日に彼はアルニムに宛てた手紙の中で、「自然的ポエジー」を「森」にたとえてこう語る。

青春と同様に二度と取り返しのつかない形でなにかが消滅し、老年のような別のものが必然的にやってくると君は思わないのかい。大きな穢れない草食の動物がいなくなった。そして象達が減少している。歩くには数日を要する程の大きな森が伐採されてしまった。そして国土全体が次第次第に道や水路や畝に分けられる。²⁾

人為、とりわけ教養の介入により混和され、時には作り変えられてしまう「自然的ポエジー」すなわち「いにしへのポエジー」Alte Poesie³⁾の運命を、ヤーコプは、森林破壊と開墾のプロセスに重ね合わせている。侵食された「自然的ポエジー」の現状を嘆くヤーコプにとって、古い資料の鋳直し(Umgebung)、翻訳、現代語訳といった「人為」の介入は忌むべきものなのである。これに対しヴィルヘルム・グリムは、フランク王国時代および中世における「外国製」の教養の介入と職業詩人の技巧的介入を、歴史的必然と見なす。彼は論文『古代ドイツ文学の成立とその北歐文学との関係について』(Über die Entstehung der Altdeutschen Poesie und ihr Verhältnis zu der Nordischen, 1808)の中で、「人為的ポエジー」についてこう語る。

自然的ポエジーが減び、もはや新たに生成しえなくなれば、それは民族に固有のあらゆるものをそなえた民族の精神の中で、教養によって得られた材料を作り変えて土着のもの(einheimisch)とする。⁴⁾

ヴィルヘルムにとっての「自然的ポエジー」は、過去の一時期においてすでに「減び」、「もはや生成しえない」ものである。それが伝承による自己生成のプロセスをたどれなくなったときに、外部からの助けを借り結果的に成立する「人為的ポエジー」は、むしろ「創作ポエジー」として、いにしへの「生」と現代の「生」との連続性を損なわない限り

において容認される。⁵⁾

「森」にたとえられた「自然的ポエジー」と「土着のもの」となった「人為的ポエジー」とをめぐるグリム兄弟間のこの見解の相違は、二人が蒐集した『子供と家庭のためのメルヒェン』(Kinder- und Hausmärchen, 以下 KHM と略記する)⁶⁾の改編をめぐる兄弟間の見解の相違に反映していると思われる。「ドイツ・ポエジーの歴史のための資料」⁷⁾すなわち「いにしえ」Altertum の破片の蒐集と保存とが彼等のメルヒェン蒐集のそもそもの目的であった。しかしながら、グリム兄弟生前に版を七回重ねた KHM を、彼等の伝承蒐集過程と改編過程から考えてドイツ民族固有の伝承とはもはや見なしえないことは、ハインツ・レレケの指摘以来自明のこととなる。⁸⁾すなわち、グリム兄弟へのメルヒェン提供者達がユグノー派の家系であるという事実から導き出される、グリム・メルヒェンのフランス起源説、および、主にヴィルヘルムの手による KHM 改編と諸話の改変という紛れもない事実である。ここに、決定版だけではなく手稿、初版を視野に入れた KHM の文献学的総括的研究が新たに要請されると同時に、グリム神話それ自体が崩壊する。KHM 序文に記された「なによりも忠実と真実性を重視した」⁹⁾というグリム兄弟の言説は偽りと見なされたのである。¹⁰⁾改変の事実が確かに露見した。しかしこの改変の目的に関してはいまだ議論が尽きない。読者の要請による改編、ピーダーマイヤーの市民像に近づけていくもくろみ、イデオロギー操作等、時代的社会的風潮の影響ももちろん考えられる。¹¹⁾しかしながらグリム兄弟はメルヒェン蒐集家である前に学者であった。生涯の研究生活を通じて、言葉、それもドイツ語とそれをとりまく文学、法律、歴史、慣習といったあらゆる精神文化に限らず目を配り、蒐集研究し続けたのである。そのような事実背景こそがこの改訂を積極的に意味付けるものであることを軽視すべきではない。改編とはすなわち自己批判の軌跡である。KHM の改編そのものが、他ならぬ編者グリム兄弟自身のメルヒェン観、歴史観、言語観、そして自然観そのもの、およびそれらの彫琢過程を提示しうるのではないか。

グリム兄弟は実際に「いにしえ」の破片を蒐集し、その改変を通じて「いにしえ」の修復を試みた。つまりその蒐集には、彼等独自の「いにしえ」の基準が反映し、その改変行為そのものが彼等独自の理念を志向しているのである。本論では、KHM の「森」Wald の描写の改編過程をたどり、その改編の背後にいかなる理念が存在するのかを考察する。グリム兄弟がさまざまな場で論述する、「自然的なもの」das Natürliche、「詩的なもの」das Poetische、「いにしえのもの」das Altertümliche、「土着」Das Einheimische という諸概念が、「森」という表象のもとに調和する。

1. グリム・メルヒェンにおける森の描写の推移

KHM 第7版200話¹²⁾における「森」の描写について検証する。まず、Wald という言葉は、Wälder (複数形)、Westerwald (固有名詞)、Waldvogel (複合語)、Waldtiere (複合語) をも含め92話に登場している。また方言で記述された話の中の「森」に相当する言葉 Holt

(KHM47)、Holte (KHM113)、Wold (KHM137)、Walle (KHM138) をも含めると、合計96話に「森」が登場していることになる。¹³⁾グリム・メルヒェンにおける「森」という場の果たす役割については以前論じたことがあるので深入りはせず¹⁴⁾、ここでは「森」をめぐる描写の改訂プロセスに着目する。

KHM 第1版はもともと総話数が156話である。第2版では161話に増加するが、この第1版、第2版間の改編、削除、補足等が最も著しい。第3版以降は、まず KHM161までの話には描写に筆が若干入るのみとなり、KHM162以降の話が第7版に至るまでに徐々に補足された。ところで第1版に「森」が描写されている話は79話である。その中の19話が第2版ではいろいろな理由で削除されている。¹⁵⁾すなわち、第2版(以降)に残った話は79話中60話であり、削除された代わりには、「森」が登場する別の話が補足された。第7版に至るまでにその数は、減少することなく徐々に増加し、最終的に上述の96話となる。その第7版96話中、メルヒェンそれ自体が第1版より継続収録されているものが63話ある。ところがその63話中3話では、第2版刊行の段階で「森」が加筆されているのである。

①「森」自体が加筆された例

a. KHM 5 「狼と七匹の子山羊」

母山羊がえさを探しに行く場所として「森」が登場する。その第7版では、「ある日母山羊は森へ行き、えさを探そうと思った。」と、えさを探しに行く場所が「森」だと明示される。しかしながら第1版に遡ると、「ある日、母山羊がえさを探しに出かけなければならなかったとき」となっており、「森」という言葉が存在しない。1810年の手稿(通称エーレンベルク稿)では、「母山羊が出かけなければならなかったとき」と外出の目的すら書かれない一層簡素なものであった。このエーレンベルク稿は、カッセルのハッセンブールーク家での口述筆記によるものである。ところが1843年の第5版を刊行する際に、アウグスト・シュテーバーによるアルザス地方のメルヒェンをもとにこの話は大幅に改編されている。¹⁶⁾実際に「森」が加筆されたのも第5版からであり、そこにシュテーバーのテキストが影響しているのは明らかである。しかしながらここでは、ヴィルヘルム・グリムが「森」の加筆を選択実行したことが重要であると思われる。なぜなら、彼が「土着のものになる」と表現した「自然的ポエジー」から「人為的ポエジー」へのプロセスが、まさにこの加筆という行為にも体现されていると考えられるからである。

b. KHM29 「三本の毛をもつ悪魔」

このメルヒェンの第7版には以下のような描写がある。

少年はその手紙を持って出かけたが道に迷い、日が暮れるとある大きな森の中へと入り込んだ。暗闇の中で少年は小さな灯りを目にした。それを頼りに歩き、小さな一軒の家にとどり着いた。¹⁷⁾

「森」の中で少年は、助言を与えてくれる老婆の住む泥棒の家にたどり着く。ところで、この描写は第1版には存在しない。第1版にはKHM29として、1812年にカッセルのアマーリエ・ハッセンブルークから聞いた同題の話が収録されている。しかし第2版刊行に際し、ニーダーツヴェーレンのドロテア・フィーマンから聞いた話をもとに大幅に加筆され、助言者と出会う場としての「森」もまたこの時点で付け加えられた。このフィーマン夫人、通称フィメーニンの提供した話には、フランスからの直接の影響が見て取れるとレレケは指摘する。¹⁸⁾ この語り手がユグノー派の子孫であるエピソン家の出であり、フランス語を話したこと、また、フランス系の説教師ラミュ氏の娘達によってグリム兄弟に紹介されたことがその理由に挙げられる。しかしながらヴィルヘルム・グリムは、そのフィメーニンからの話を付け加えこそすれ、たとえば「青ひげ」¹⁹⁾ のような明らかにペローの影響下にある数話のように削除しなかった。この選択を誤りだと指摘することは簡単である。しかしむしろこの選択の基準こそ、グリム独自の理念が隠されているのではないかと思われる。

c. KHM46「フィッチャーの鳥」

この話の第7版では、娘を誘拐する魔法使いは、「真っ暗な森」の真中の小さな家に住んでいる。²⁰⁾ ところが第1版には、魔法使いの家が森に位置するという記述がない。「森」は第2版から付け加わり、第3版からはそこに「真っ暗な」finster という形容詞が加筆されている。もともとこの話は、カッセルの牧師の娘フリーデリケ・マンネルの提供した話と、同じくカッセルの薬局の娘で後にヴィルヘルムの妻となるドルトヒェン・ヴィルトの話とを合成したものとされる。²¹⁾ 「合成」Kontamination という作業は、メルヒェンの蒐集とその編集に際し、「勝手に付け加えることは一切していない」²²⁾ というグリムの主張に一見矛盾をきたしているかに見える。実際この言説と改変の事実との間に矛盾を覚える研究者も少なくはない。²³⁾ しかしながら、メルヒェン蒐集の目的である「いにしえ」の保存とその断片の再現を第一に考えれば、二人の話の人為的「合成」、および「森」の加筆に代表される改変もまた、「いにしえ」の「生」の再現の一プロセスと見なす。そしてその結果定着した、魔法使いの住む「真っ暗な森」に、彼等の志向性が投影されていると考えられるのである。

KHM5における「森」の加筆で結果的に強調されたのは、食物を供給する場としての「森」というトポスである。動物だけではなく当然人間にも自然の恵みを与える「森」の姿は、KHM3「マリアの子」では木の実や木の根などを食料として提供する「森」、KHM13「森の中の三人の小人」では少女が苺を摘みに行く「森」としても表されている。また、助言者と出会うKHM29の「森」と同様に、KHM64「金のガチョウ」の「森」でも主人公は助言を与える灰色の小人に遭遇する。魔法使いの住む「森」は、話の筋の上で人間に危害を加える立場の者、たとえば盗賊(KHM29)や魔女(KHM15)が住む「森」と繋がるものがある。話が進行する上で「森」が果たす様々な役割は、KHMの個々のメ

ルヒェン同士で互いに関わり合っている。この現象に関しては、蒐集された時点でそれぞれの話が最初から似通っていたからだと単純に言いきることも可能ではある。しかし上述した三つの加筆例を考えると、グリム兄弟、あるいはヴィルヘルム・グリムがもともと持っていたと考えられる「森」の像があり、そこに彼等がメルヒェンの「森」を近づけようとしているようにも、また、彼等有する膨大なメルヒェンの資料およびその知識が、たとえばそのモチーフの一つである「森」の総合的なイメージを、蒐集改変の過程でグリムに与えてしまったとも考えられる。

②「森」の描写が豊かになった例

「森」という言葉の加筆ではなく、「森」の内部描写が改変の過程で詳細になっていった例も多い。たとえばKHM1「かえるの王様あるいは鉄のハインリヒ」では、王女とかえるとの出会いの場、および約束の場としての「森」が、正確には「森」の中の泉が登場する。「森」はエーレンベルク稿からすでに記載はされている。しかしその描写が版を重ねるごとに豊かになっているのである。まずエーレンベルク稿、第1版ではそれぞれ以下のような描写で話が始まっている。

ある国王の末娘が森へ行き、涼しげな泉の縁に腰掛けた。(エーレンベルク稿)²⁴⁾

ある日一人の王女が森へ行き、涼しげな泉の縁に腰掛けた。(第1版)²⁵⁾

ところが第2版では以下ようになる。

その森の真中に澄んだ涼しげな泉があった。²⁶⁾

泉の場所が「森」の真中に限定され、結果的に「森」の面積が広がっている印象を与えている。さらに泉には「澄んだ」rein という形容詞が付され、美的要素が強調されているようである。この箇所が第3版では次のようになる。

王の居城のそばには大きくて暗い森があった。そしてその森の中の菩提樹の古木の下に泉があった。²⁷⁾

「森」に「大きい」groß、「暗い」dunkel という形容詞が付されたと共に、泉の側に「一本の菩提樹の古木」が書き加えられている。第4版以降はこの表現が定着し、第7版決定稿に至る。

KHM53「白雪姫」では、白雪姫が獵師に置き去りにされる場所として「森」が登場する。白雪姫はその「森」の中を歩き回った末、七人の小人の家を発見する。このさまよう場としての「森」はエーレンベルク稿から存在するのだが、彷徨過程の描写が版を追うごとに以下のごとく加筆されているのである。

さて白雪姫は大きな森の中で一人ぼっちになると激しく泣いた。そして先へ先へと
 どんどん歩いて行き疲れ果て、ようやく一軒の小さな家の前へとやって来た。²⁸⁾

これが第1版になると以下ようになる。

白雪姫はしかし大きな森の中で一人ぼっちになり、怖くてたまらなくなった。そして
 歩き出した。尖った石を越え、茨を抜けて一日中歩き通した。日が暮れようとした
 頃ようやく一軒の小さな家にたどり着いた。²⁹⁾

「怖い」という感情的要素、「尖った石」、「茨」といった苦難を強調する小道具が、「森」
 の描写に加わっている。この部分が第2版では次のような描写となる。

さて、かわいそうな白雪姫は大きな森の中で一人ぼっちになり、あまりにも怖くて
 たまらなくなったので、木々の葉という葉すべてを見やり、どうすればいいのか考えた。
 そして歩き出した。尖った石を越え、茨を抜けて歩いた。野獣は彼女の側を通り
 過ぎたが危害は加えなかった。彼女は歩ける限り歩いた。まもなく日が暮れようかと
 という頃、一軒の小さな家を見つけ、体を休めるためにその中へと入った。³⁰⁾

「森」に様々な付属物を加筆し、その付属物と人間との関係を描写するやり方で、「森」の
 大きさおよびその空間をさまよう行為の過酷さが一層強調される結果となる。第3版以降
 の描写は、上述の第2版に若干手が増えられるにとどまる。

過酷な試練の場に「茨」が加筆されたもう一つの例がKHM12「ラプンツェル」である。
 この話では、彼女が幽閉される塔のある場所としての「森」は、第1版から描かれている。
 王子が塔から突き落とされ両目を怪我する描写の中で、第6版において始めて「茨」が付
 け加わる。

「森」以外の自然描写に関しても、またそれ以外の個々の事物に関しても、さまざまな
 加筆が認められる。しかしこの加筆をヴィルヘルム個人の恣意的着想にのみ帰する見解は、
 グリム兄弟がメルヒェン蒐集家のみならず法学、言語学、文献学、民俗学に携わる研究者
 であるという事実を度外視しているように思われる。なぜなら実際彼等はひとつのことば
 を、それをめぐる膨大なパラダイグマの中から注意深く選び出しているからである。

2. グリムにおける「森」のパラダイグマ

『ヤーコブ・グリム、ヴィルヘルム・グリムによるドイツ語辞典』(Deutsches Wörter-
 buch von Jacob und Wilhelm Grimm, 以下DWと略す)のAからFの途中(Frucht)まで
 は、グリム兄弟が実際に作成したものである。したがって彼等の言語学および文学的知
 識を探る重要な資料となる。³¹⁾

「森」Waldという項目に関しては、DWには残念ながら彼等の手による記載はない。し
 かし、「森」Waldの類概念と見なしうる「森林」Forstにその手がかりがある。ヤーコブ
 の手による「森林」Forstの項目には、「一般的な『森』Waldではなく、『保安林』
 Bannwald、『敷地内林』Herrnwaldを意味し『辺境』Markの対立概念を表す」と記されて
 いる。グリムの後継者によって作成されたDWの「森」Waldの項目に、「辺境」の意が付
 されていることを考えると、グリム兄弟が「森林」Forstではなく、「森」Waldという語
 の「辺境」および「境界」という含意を強く意識していたことは充分考えられる。また
 「森林」Forstの項目では、「猟師は『猟区』Revierと『森林』Forstを区別する」、「かつ
 ては森であり、その後牧草地となった地域にはForstという名称が遺されている」という
 記述を経て、最後に『『森』Waldと同じ意味で用いられることもある』と記されている。
 「森」Waldと「森林」Forstとが語用のレベルでは同等に用いられる現象をグリムは認め
 てはいる。しかし本質的にはそれぞれに別の概念を当てはめていたと見なすのが妥当であ
 ろう。実際、KHMにおいても「森林」Forstという単語は一度も登場しない。たとえば
 ベヒシュタインのメルヒェン集において「森林」と「森」という単語がひとつの話の中で
 さえ交互に登場し、同等に扱われている事実と比較しても、KHMではむしろ意図的に、
 なんらかのイメージを目指してことばが詳細に吟味されていることは明らかであろう。³²⁾

前章で指摘したKHM12における「茨」Dornの加筆に関しては、KHM50「茨姫」の
 「茨」の影響も十分に考えられる。³³⁾しかしそれだけでは、意図的ではなく恣意的な加筆
 であるというレッテルは拭い去れない。いずれにせよ確かなのは、グリム兄弟の「茨」に
 関する豊富な知識である。DWの「茨」Dornの項目において、意味の第一番目には「刺」、
 第二番目には「茨のしげみ」という意味が付され、「生きた柵」「生長する柵」の比喩とさ
 れる。この点ではKHM50「茨姫」の茨はその象徴といってもよい。さらに第三番目には
 「象徴的に痛みを伴うもの、耐えがたいもの、面倒なもの、傷つけるもの、悪いもの」と
 あり、「苦悩という刺が私を刺す」といった例が挙げられている。そして第四番目には慣
 用語として、「目の中の刺」すなわち厄介なもの、耐えがたいもののトポスの表現が挙げ
 られているのである。また「茨に落ちる」(墮罪)、「茨の上に横たわる」(苦痛に耐える)
 という慣用語も挙げられている。したがって、「白雪姫」の「森」をさまよう行為の過
 酷さが強調される結果となった「茨」の加筆にしても、「ラプンツェル」の王子の目を傷
 つける道具として加筆された「茨」にしても、ヴィルヘルム・グリムのそのことばの選択
 の背景には、「ルターからゲーテまで」³⁴⁾もしくはそれ以前の文献から引き出された膨大
 な表現の雛型が存在しているのである。

KHM1に加筆された「菩提樹」Lindeに関しては、DWの「菩提樹」の項目の第三番目
 の意味として、「その下に恋人同士が座り、その枝には愛の鳥ナイチンゲールが囀る」と
 いう愛のトポスが挙げており、その例の一つにヴァルター・フォン・デア・フォーゲル
 ヴァイデのミネ歌謡『菩提樹の下』(Under der linden)が引用されている。

荒野に立つ	Uder der linden
菩提樹の下	an der heide,
そこに私達二人の臥所があった	dâ unser zweier bette was,
そこであなた方は	dâ mugent ir vinden
美しい花々草々が	schöne beide
折られているのを見つけるでしょう	gebroschen bluomen unde gras.
谷間にある森の前で	vor dem walde in einem tal,
タンダラデイ	tandaradei
ナイチンゲールが美しく囀っている	schône sanc diu nahtegal. ³⁵⁾

DWの「菩提樹」の項目はすでにグリムの筆によるものではないので、この説明を直接参照したとしても推測の域を出ない。しかしながら、中世歌謡の研究に生涯邁進していたヴィルヘルム・グリムが、「森」、「泉」、「菩提樹」というトリアーデの背景に、ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデのこの歌謡を想起していなかったとは考えにくいのである。ヴィルヘルムは実際、ヴァルターについての論文³⁶⁾を発表している。そして『ドイツの民衆叙事詩とミンネ歌謡における自然描写について』(Über die Naturbeschreibung in dem deutschen Volksepos und dem Minnegesang, 1847)では、ヴァルターの自然を感じる感覚を評価している。³⁷⁾ カール・ラッハマン編集『ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデの詩』(Die Gedichte Walters von der Vogelweide, 1827)³⁸⁾についての書評でもヴィルヘルムは特に、ウィーン宮廷に仕えた詩人ヴァルターとレオポルト・フォン・エースタライヒ公爵との封土をめぐるエピソードに着目し、「それでも彼は詩人として、自分の他の歌謡の中でなによりも森を称えている」³⁹⁾ことを強調している。KHM 1の「森」をめぐる加筆の背後にはしたがって、称えられるべき「森」の自然美を強調し、王女と将来の伴侶との運命的な出会いを、ミンネ歌謡の愛のトポスに近づけて演出しようとする編者の意志が存在するといっても過言ではない。ヴィルヘルムはヴァルターの詩に、立ち戻るべき、そして再現すべき「詩的なもの」を見いだしているのである。

この「森」、「泉」、「菩提樹」のトリアーデに関してヴィルヘルムは、前述の『ドイツの民衆叙事詩とミンネ歌謡における自然描写について』中で、『ニーベルンゲンの歌』第16章のジークフリート暗殺の場面をも指摘している。⁴⁰⁾ グリム兄弟が『ニーベルンゲンの歌』を、その類話の存在を容認しつつ、ギリシアの『オデュッセイア』にも匹敵するドイツの「国民的ポエジー」Nationalpoesieと見なしたことが、この英雄叙事詩において「神話的意味と歴史的内容的両要素が一体のものとして現れている」ところに、叙事詩そのものの「詩的」本質があると考えたこと、この叙事詩を一国の命運をかけた「すさまじい戦い」から個別の夢物語や恋物語に至るさまざまな「生」を包括する最も優れた叙事詩と見なしたことは、別の論文で指摘した。⁴¹⁾ ところで、ジークフリート殺害の場としての「森」は、ドイツの『ニーベルンゲンの歌』に特有のものであり、同エピソードが挿入されている『エッダ』における、シグルス殺害の場が「森」ではないということヴィルヘルムは承知して

いた。⁴²⁾ したがってグリム兄弟が、『ニーベルンゲンの歌』における「詩的」本質と包括的な「生」の表出を、「ニーベルンゲンのもの」さらには「ドイツ的なもの」と見なすとき、この殺害の場としての「森」の存在をまったく度外視しているとは考えにくいのである。そこで、ヤーコブ・グリムが『ドイツ伝説集』(Deutsche Sagen, 1816)の序文において、伝説とは「より歴史的」であり、メルヒェンとは「より詩的」であると見なしたことを想起すべきであろう。⁴³⁾ 彼等が「自然的ポエジー」のさまざまな表出形態の中で「より詩的」であると考えたメルヒェンを独自の基準にしたがって蒐集し、それらを目的論的に改編し改変していくその途上で、この「ドイツ的なもの」を「詩的」に物語る『ニーベルンゲンの歌』の存在が常に念頭にあったとすれば、⁴⁴⁾ その背景には、暗殺の場、すなわち「生」か「死」かの「運命が決定される場」としての「森」の像もまた常に存在していたはずである。KHM 1の「森」という場での王女とその将来の伴侶との運命的な出会いを演出する際に、「森」、「泉」、「菩提樹」に彩られた『ニーベルンゲンの歌』の運命の場面を意識しながら、なによりメルヒェンとして「より詩的」であることを求めて改変がおこなわれたといえるのではないだろうか。

3. 「土着」であることと「土着」になること——「いにしえ」の「詩的」再現

KHMの蒐集と改作をめぐる問題で争点となるのは常に、グリム兄弟がなにをもってドイツ民衆のメルヒェンと見なしたかという基準と理念である。ヴィルヘルム・グリムの手による第1版の序文には次のような箇所がある。

私達はこれらのメルヒェンをできるかぎり純粋な形で捉えようと努めた。多くの場合、脚韻や韻文によって話の流れがさえぎられる。それらの話はしばしば頭韻すら踏んでいる。しかしながら語りでは歌われるわけではない。こうしたものこそが最も古く最も優れた話なのだ。いかなる細目も付け加えられたり、あるいは潤色されたり変更されたりしていない。もう充分豊かである話をアナロジーや連想で間延びさせる気がしないからだ。これらの話を人為的に作り出すことはできない。⁴⁵⁾

ここでヴィルヘルムは、「語り」と「韻」が調和した形式、すなわち「口語と格言がうまく溶け合っている」形式⁴⁶⁾のものを「最も古く最も優れた話」と見なしている。

韻文とポエジーの関係についてはヤーコブ・グリムが、自著『法の内なるポエジーについて』(Von der Poesie im Recht, 1819)⁴⁷⁾でふれている。彼にとって法とポエジーとは出自を同じくするものであり、古いポエジーには古い法慣習が、古い法には古いポエジーがあると考えられる。ヤーコブは、形式と内容の両側面からポエジーを論じ、形式という側面から見たドイツの古いポエジーの一例に頭韻を挙げている。また、最古のポエジーが頌歌であると主張するヘルダーに対して、それは英雄叙事詩である⁴⁸⁾とするグリム兄弟は、散文化を世俗化と見なし、散文ではなく韻文に古いポエジーの一層強い「力」を見て取る。

「詩的なもの」 das poetische を形成するものとはここでは、「不思議なもの」 das wunderbare と「信じる（にたる）こと」 das glaubreiche なのである。⁴⁹⁾ 「不思議なもの」、すなわち容易に接近できず遠くにあるものを、世俗とは離れた神的なものものとして「信じる」という純粋な態度こそが重要となる。

ヤーコブは同論文において、ドイツの立法は、詩的要素という内実を核として有すると考えよう語る。

もし最古のドイツの法蒐集が母語で私達のもとへと伝えられていたならば、それは土着の規則や定めから起草されたラテン語という外来の言葉で記されたものよりも、この上なく貴重であったにちがいない。⁵⁰⁾ (傍点筆者)

彼が蒐集した『ドイツ法律古事誌』(Deutsche Rechtsalterthümer, 1828)や『判例集』(Weisthümer, 1840-78)といった膨大な資料の中には、外来語であり教養言語であるラテン語で記されたものも少なからず存在する。これら「人為」の加わったものは、ヤーコブにとって純粋な意味で「自然なもの」ではない。しかしその内容において「いにしへの生」を伝えるものであるならば、記録が残らないよりはいくらかはよしとされる。彼は、ドイツの任意の土地で実際その慣習から育ち、生活に根ざし密着したものを「土着のもの」 einheimisch と見なす。それがたとえラテン語で伝えられていても、その土着性は保持されていると考える。

ヤーコブは、1860年のヴィルヘルム・グリム追悼公演でも、自分達の学生時代の回想箇所「私達は土着の言語や文芸を研究することを目標とした」(傍点筆者)と述べ、ここでも「土着」という語を使っている。⁵¹⁾ この「土着」の言語とはドイツ語だけに限らず、地域的には北欧諸言語をも含み、歴史的には中世、古ドイツ語からゴート語、ルーネ文字、さらにはゲルマン祖語に至る広い範囲を指している。さらに「土着」の文芸には、中世英雄歌謡などの文学に限らず法律や慣習も、それが「詩的と見なされる」限りにおいて含まれるのである。もちろん、グリム兄弟のメルヒェン蒐集も含まれる。すなわち、この「土着」とはまさに「生への連関」 Beziehung auf das Leben⁵²⁾ という意味での「土着性」なのであり、出自のみを問うものではないことが容易に推察されるであろう。

ところでこの「母語」と「外来語」との対比という点ではヴィルヘルムもまた、論文『古代ドイツ文学の成立とその北欧文学との関係について』において「土着」という概念を用いる。

ポエジーは無知と無垢な状態で徐々に発展してゆき、新しい出来事や民間信仰などが提供する偉大なことや魅力的なことのすべてを混合したり混同したりしながら自らの内へと取り込んだ。それらはどんな場所においても次第にその場所に馴染み土着のものとならなければならなかった。そしてそのためにポエジーは、地域と時代と民族を変えながら、遠くのものを引き寄せ、近くのものに神秘に満ちた遠方へと移

し置いたのである。⁵³⁾ (傍点筆者)

この場合の「土着」とは、「外国風」 ausländisch の反対の概念として述べられる。DWの「土着」 einheimisch という語の説明には、ラテン語の domesticus (家の、個人の)、vernaculus (自国の、土着の、家で生まれた)、intestinus (内の) という語が充てられており、さまざまな引用文でも上記の対比構造に変わりはない。しかしここで重要なのは、「土着のものになる」 einheimisch werden というプロセスの容認である。⁵⁴⁾ 時代が進むにつれて姿を変えながらたえず引き継がれ、定着した形式を決して持たないポエジーは、浮動し順応しながら、その土地の風土、響き、それに色彩というものを身にまとう。こうしていたところで特性、生命、財産といったものを獲得し最終的に「土着」のものとなる。このような現象をヴィルヘルムは必然ととらえ、「自然的ポエジーが減び、もはや新たに生み出されえないとき、それは民族に固有のあらゆるものをそなえた民族の精神の中で、教養によって得られた材料を作り変えて土着のものにする」⁵⁵⁾ という歴史上のプロセスを、自己発生の延長線上にとらえて容認するのである。

それに対しヤーコブにおける「土着」の概念とは、あくまでも外部にある所与の事象の模倣から出発するものではなく、「古い由来にできるだけ忠実であり続けるもの」⁵⁶⁾ である。だからこそ彼は、「材料を作り変える」ことよりも、「いにしへのもの」により忠実な状態にあるものの発掘に全力を尽くす。ところがヴィルヘルムは、「いにしへのもの」に外来の素材が歴史上加わっていくことを、それがドイツという土地で育ち花開く植物にたとえる限りに容認する。まさにこの見解の相違がメルヒェンの蒐集にも影響しているのである。

KHM 研究で指摘された、フランス系移民の子孫の提供する話をドイツのメルヒェンと見なすのか、改作は是認しうるかという問題を解くためには、このようにグリム兄弟の「詩的なもの」と「土着のもの」の基準を把握することが肝心なのである。ヴィルヘルムは KHM 第2版序文の中で次のように語る。

同じような生活様式を変えずに生きてきた人々にとって、伝承されたものに対する愛着は、変化を求めることが常である我々が理解するよりもはるかに強い。だからこそ伝承されたものは幾重にも守られ、ある種の強い親近感と内面的な強さを保持するのである。⁵⁷⁾

メルヒェンの提供者とされるドロテア・フィーマンの伝承に対する態度を賞賛した箇所である。ここではむしろフィーマン個人を評価しつつ、「自己生成」 Sichvonselbstmachen という語に象徴される、グリム兄弟の伝承の理念が語られているといっても過言ではない。「古い由来に忠実」であろうと努力する限りにおいて、すなわち「いにしへのもの」をできるだけ忠実に再現再話しようと努力する限りにおいて、語られたものに表れるいにしへの「生」と語り継ぐものの現実の「生」との間に、「連続性」もしくは「普遍性」という

意味での「親近感」が獲得され、語られたものに、「自己生成」を繰り返す「力」となる「内面的な強さ」⁵⁸⁾が補強されてゆくのである。この「いにしえのもの」に忠実である態度が、語られたものへの「親近感」という普遍性を確保させるというヴィルヘルムの考えの背景には、「自然」naturもしくは「神(話)的なもの」das göttlicheとしての「いにしえのポエジー」が、無味乾燥な歴史記述の開始以前に位置する「超歴史的なもの」das übergeschichtlicheとして普遍性を帯びているというヤーコプ・グリムの思想が影響している。⁵⁹⁾すなわち KHM におけるフランス系移民の子孫によるメルヒェンの受容の問題は、次のように考えられる。第一に、彼等が自分達にとっての「いにしえのもの」に忠実に語っている限りにおいて、語られたものの普遍性は自ずと確保される。第二に、「いにしえのもの」とはこの場合、歴史すなわち時間を超越した無時間的なものであるので、普遍性を有するといえる。したがってそれは、あらゆる民族のあらゆる時代において「親近感」を伴う「土着のもの」として現れる。第三に、語り手達が歴史的必然によりドイツ(ヘッセン)という土地に生活の基盤を移し根付いているという限りにおいて、彼等の言の葉に上る話もまた「土着のもの」と見なしうる。「ある種の強い親近感と内面的な強さ」のむこうにグリム兄弟が垣間見るものは、ドイツ、フランスといった国境を越えた普遍的な「いにしえ」の「生」である。この三つの事象を満たすという条件下で、ヴィルヘルムによる KHM の改変と諸話の改作も行われたと考えられる。

4. 「森」の象徴性

グリム兄弟が「いにしえのもの」の断片と見なした民間伝承の外面的な多様性は、時として多種多様に枝分かれした植物の亜種にたとえられる。これらの亜種、すなわち類話の基盤となるものについて、KHM 第2版序文でこう語られている。

民衆詩の叙事的基盤は、自然全体を通して多種多様な段階に広がっている緑に等しい。それは、決して人を疲れさせずに、満足させて和ませるのである。⁶⁰⁾

グリム兄弟はそれぞれの著作において、「詩的なもの」を時おり「叙事的なもの」das Epische とも言い換える。したがってここでは、KHM における基盤としての「叙事的なもの」すなわち「詩的なもの」が、緑に象徴される自然、とりわけ植生に関する描写、すなわち「森」の中に表現されると考えられる。

先に触れた1811年5月20日に書かれたヤーコプ・グリムに書簡において、「自然的ポエジー」の危機が、「青春と同様に二度と取り返しのつかない形で」の「なにか」の消滅、「老齢のような別のもの」の到来、「大きな穢れない草食動物」の消滅、「象」の減少、「歩くには数日を要する程の大きな森」の伐採、そして「国土全体」の「道や水路や畝」への分割にたとえられている事実にはすでにふれている。⁶¹⁾この後には次の文が続いている。

なぜ叙事的ポエジー (die epische Poesie) だけが変わらない姿でいられようか。それが森へと身を置こうが、孤立してそびえる一本の木に身を置こうが、我々[のポエジー]にとってはどうでもよいことなのである。その身を置いた場所から愛する人の亡骸に寄り添う悲しみに暮れた『ティトゥレル』のジグーネのように、物悲しげにしかし希望を失わずに、木の葉のむこうに天を仰ぎ見るのである。⁶²⁾

ヤーコプにとって「叙事的ポエジー」であり「自然的ポエジー」である「大きな森」もやはり、例外なく「人為」の脅威にさらされ開墾され、そして空しく破壊される運命にある。ここで彼は、中性名詞の「叙事詩」Epos をわざわざ女性名詞の「叙事的ポエジー」die epische Poesie と置き換え、それを嘆きのジグーネの姿になぞらえる。⁶³⁾自分の身が「森」に置かれようが「一本の木」に置かれようが頓着されない不条理を嘆く「叙事的ポエジー」を、まるで住みかを追われた森の妖精かなにかのような女性の姿で表現し、最愛の人を失い悲しみにくれつつも希望を失わない力強い女性像にたとえているのである。⁶⁴⁾ところで、ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデの詩『ああ、どこへ消えてしまったのか』(Owê war sint verschwunden) には、過去の思い出を懐かしむ以下のような描写がある。

私が子供のころから育った国も人も
まるで空言であったかのように見慣れぬものとなってしまった。
共に遊んだ私の仲間達は、疲れ老いた。
野は荒らされ、森は伐り払われた。
liute unde lant, dar ich von kinde bin erzogen,
die sint mir frömde worden reht als ez sî gelogen.
die mine gespiln wâren, die sint träge unde alt.
bereitet ist daz velt, verhouwen ist der walt, (...)⁶⁵⁾

ヴィルヘルム同様ヴァルターの自然観を賞賛したヤーコプが、同詩人のこの箇所を意識していたこともまた容易に推察しうることである。ヤーコプが「自然的ポエジー」について語る時、生命力豊かで神秘に満ちた「森」の姿が意識されているのと同時に、常に中世歌謡、さらにはそこに「いにしえ」より流れている「生」もまた意識されていることは疑う余地もない。それは、1811年12月26日にヤーコプがサヴィニーに宛てた手紙にも以下のように表れる。

古い歴史が自ら種を蒔き繁殖する森であったならば、現代の歴史は大きな野原にたとえられる。そこで歴史家たちが額に汗して一画一画を耕し、それから現代の歴史を全世界史的視野によって分断する。⁶⁶⁾

法の記述同様、歴史の記述においても、「詩的なもの」の喪失を嘆くヤーコブは、ここでも再び「森」を登場させ、「世界」すなわち「生」を取り巻くあらゆる事象を、時間的にも空間的にも無機質に分断する、現代の歴史家達の無味乾燥な歴史記述を批判する。「森」とは彼にとって、自己の内部で繁殖しうる有機体であったと同時に、あらゆる「生」の絶え間ない分断されえない連続性、すなわち普遍的調和的世界の象徴でもあったといえる。

ところで、グリム兄弟が「いにしえ」の断片としてのメルヒェンを蒐集した19世紀初頭の現実の「森」は、豊かな姿をもちやとどめてはいなかった。森林の大部分では、中世以降繰り返された伐採により樹木の大半を失っていたか、18世紀に開始された植林によりようやく育ちつつある幼木が大地を覆っていたにすぎなかった。領土としての森林は、厳しい森林法で一見保護されていたかに見えた。しかしその影では盗伐の被害が甚だしかったということを、森林学者カール・ハーゼは自著『森林史——学問と実践のための概説——』(Forstgeschichte. Ein Grundriß für Studium und Praxis, 1985)で詳細に述べている。人間が戦えば森が消える。人間が増えれば森が減る。この森林をめぐる自然と人間との関係、いわゆる森林史に貢献したのは、他ならないヤーコブ・グリムの約3000例に及ぶ中世慣習法の蒐集『判例集』の中の「森林法」に関する資料であった。

グリム兄弟の古いドイツの言語、文学、法律への関心とは、なにも自分達が「いにしえ」のコンテクストに埋没することを望むものではない。彼等はタキトゥスの『ゲルマニア』に描写される、森に暮らしたスエビ族ではなく、あくまでも19世紀の言語文献学者であった。そして古典および古代の壮大な資料を蒐集し、「人間の教え、ドグマ、科学」⁶⁷⁾といった「教養」ゆえに埋没した「いにしえ」の遺物を発掘することをむしろ試みたのである。しかしながらグリム兄弟にとっての「いにしえ」の精神、「いにしえ」の「生」の復活とは、断片の無作為な寄せ集め、断片同士の無秩序な合成、もしくは「いにしえ」の断片を現代のコンテクストに「貼り付ける」ことであってはならない。そうではなくむしろ「いにしえ」を、「いにしえのコンテクスト」に置いたまま復活させるべきと彼等は考えたのではないだろうか。たとえば「判例」とは、ある法的処置を受けるに至るまでの動機、背景、プロセスとその結果というコンテクストなしには語れない。その判例の中にヤーコブは、森林をめぐる「生」を見いだしたと推察される。グリム兄弟がナポレオン戦争に代表される当時の過酷な政治情勢下に生きたことを考えれば、彼等の思想に政治的イデオロギーが存在していることを完全には否定できない。しかしながら、荒廃の一途をたどった森林すなわち自然の歴史というもうひとつの背景、および森林の危機的状況という事実を抜きにしては、グリム兄弟の「自然的なもの」も「詩的なもの」も、回帰すべき理念としての「ドイツ的なもの」das Deutscheも当然語りえないのである。そのためには、それらの概念を構成する「自己生成」の力を、「不思議なもの」を、「神(話)的なもの」を、「信じるにたる」ものとして信じ、「いにしえ」と現代との「生の連続性」を信じるのが肝心となる。これらすべての概念の象徴といっても過言ではない「森」を、無味乾燥な記録ではなく「詩的」に再現することこそを、グリム兄弟はKHMの蒐集改変を含めたすべての仕事において目指したのである。

おわりに

グリム兄弟におけるこの森の象徴性は、1805年4月18日にヤーコブがヴィルヘルムに宛てた手紙まで遡ることができる。

唯一無二の時代、そこではいにしえの理念を、君風にいえば騎士世界の理念を我々の内部に生き生きと開示させるうる。そして我々を制限する慣習そのものから解放しうる。そのような唯一無二の時代が、今や森に姿を変えている。そこでは野獣が徘徊する。たとえば狼。人間が彼等と共存するためには、彼等と共に吼えねばならない。⁶⁸⁾

ヴィーガントと口論をしたというヴィルヘルムを慰めるために、ヤーコブがバリから書き送ったものである。ヴィーガントを「自慢家」と呼び、そのような性格の純粹無垢な側面、すなわちポジティブな側面を「青年期」にたとえる。「唯一無二の時代」とはこのような無邪気な時期のたとえなのである。それがヤーコブにとっては「いにしえの理念」、ヴィルヘルムにとっては「騎士世界(すなわち中世)の理念」を開示する時空となる。ヤーコブにより「大きな森」にたとえられた「自然的ポエジー」の破壊のプロセスと、ヴィルヘルムにより容認された「人為的ポエジー」の「土着化」のプロセス、換言すれば「いにしえ」のものに外部からの介入を一切認めようとしないヤーコブの意思と、外来のものが関与したとしても、それが必然であるならば「土着」と見なし容認するヴィルヘルムとの志向性との相違がここに象徴的に表れている。しかしこれはあくまでも想起する「森」の時代背景、「森」の破壊によせる想念、「土着」の概念をめぐるグリム兄弟間の相違であって対立ではない。ヤーコブにとっての「土着のもの」では始原がなにより重視され、ヴィルヘルムにとってはむしろ結果に重きが置かれる。この相違が、歴史的資料としての「いにしえ」の蒐集にあくまでも固執し、KHMよりはむしろ『ドイツ伝説集』に携わったヤーコブと、蒐集された「いにしえ」の断片の復元をKHMの改編と諸話の改変の中で志したヴィルヘルムとの、古いドイツの文献研究における立場の相違へと繋がるのである。「いにしえ」とは、彼等が不断に抱き続ける理念としての「森」の姿をとる。そしてKHM改編の直接の背景には、ヴィルヘルム・グリムの「騎士世界の理念」が存在している。しかしながらその背後に常に垣間見えるものこそ、ヤーコブ・グリムの「森」すなわち「いにしえの理念」なのである。

注

- 1) Kunstpoesie は「創作ポエジー」、「創作詩」、「芸術詩」と普通訳される。しかしながら、これを「加工」Zubereitungと見なし批判するヤーコブ・グリムのゆるぎない態度から、ここではあえて「人為的ポエジー」という訳語を付し、「自然」

- すなわち「自己生成」ein Sichvonselbstmachen と見なされる Naturpoesie と対置させる。vgl. Reinhold Steig (Hrg.) (1970): *Achim von Arnim und Jacob und Wilhelm Grimm*. Bern, S. 117f.
- 2) zit. nach: Steig (Hrg.) (1970): a.a.O., S. 119.
- 3) ヤーコブは、「自然的ポエジー」Naturpoesie を、「いにしへのポエジー」Alte Poesie、「民衆のポエジー」Volkspoesie とも言い換える。また、「いにしへの叙事詩」die alte, epische Poesie と同並置し、「伝説物語・神話物語」Sagen-, Mythengeschichte と同一視する。vgl. Steig (Hrg.) (1970): a.a.O., S. 117ff.
- 4) W. Grimm (1808): *Über die Entstehung der Altdutschen Poesie und ihr Verhältnis zu der Nordischen*. In: W. Grimm: *Kleinere Schriften*. I, S. 114. (以下 W. Grimm: KS と略記し、巻数をギリシア数字で示す。)
- 5) 拙論「ことばの活性と生の連続性——『古いドイツの森』序文に見るヤーコブ・グリムのポエジー観」、『西日本ドイツ文学』13 (2001)、9-19頁参照。
- 6) 第1版は1812年に第一巻、1815年に第二巻が刊行される。その後、1819年に第2版、1837年に第3版、1840年に第4版、1843年に第5版、1850年に第6版、1857年に第7版(グリム兄弟生前の最終決定版)が刊行される。
- 7) J. Grimm (1811): *Aufforderung an die gesammten Freude deutscher Poesie und Geschichte erlassen*. In: Heinz Rölleke (1985): *Die Märchen der Brüder Grimm*. München/Zürich, S. 63ff.
- 8) vgl. Heinz Rölleke (1975): *Die ‚stockhessischen‘ Märchen der ‚alten Marie‘. Das Ende eines Mythos um die frühesten KHM-Aufzeichnungen der Brüder Grimm*. In: *Germanisch-Romanische Monatsschrift NF*. 25. Hf. 1, S. 74-86; Ders (1985): *Die Märchen der Brüder Grimm*. München/Zürich.
- 9) KHM. 7. Aufl. (1991), S. 21.
- 10) ジョン・M・エリスに代表されるアメリカのグリム研究者が、とりわけ痛烈に批判した。
- 11) vgl. Rölleke (1985): a.a.O.
- 12) 「子供のための聖人伝」(Kinderlegenden、以下 KL と略す)10話を入れると全210話となる。この KL は KHM 第2版以降に設けられたカテゴリーであるため本論では便宜上除外して考える。(KL は第2版から第5版までは9話であり、第6版以降10話となる。)しかしながら、KL 9「天上の婚礼」のように KHM 第1版では第二巻35番(第1版は一卷と二巻の間に通し番号が存在しなかった)に収められていたものが第2版以降 KL に移された例もある。
- 13) KHM 1, 3, 5, 8, 9, 11, 12, 13, 15, 17, 20, 22, 23, 26, 27, 28, 29, 31, 33, 36, 37, 38, 39, 40, 44, 45, 46, 47, 48, 49, 51, 52, 53, 54, 55, 57, 59, 60, 62, 64, 65, 68, 69, 71, 73, 74, 75, 76, 80, 81, 85, 88, 90, 93, 97, 99, 100, 102, 103, 106, 107, 108, 111, 113, 116, 121, 122, 123, 125, 127, 128, 132, 134, 136, 137, 138, 141,

- 142, 146, 147, 153, 157, 161, 163, 165, 166, 169, 171, 174, 179, 181, 183, 191, 193, 197, 199. 合計96話。ちなみに KL の中で森の描写が存在するものは5話(KL 1, 2, 3, 6, 10)であるから、全210話中101話に森が存在するともいえる。
- 14) 拙論「グリム・メルヘンと通過儀礼——森に表れる死と再生の図式——」、『九州ドイツ文学』10 (1996)、38-61頁参照。
- 15) 部分的には1822年に出された KHM 注釈書に類話として略記されている。
- 16) グリム兄弟の図書目録の2248番に、„August Stöber: Oberrheinisches Sagenbuch. [Nebst] Suppl.: Elsässisches Volksbüchlein. Straßburg: Schuler; Heidelberg: Winter 1842“ と記載されている。vgl. Ludwig Denecke u. Irmgard Teitge (Hrg.) (1989): *Die Bibliothek der Brüder Grimm*. Weimar, S. 205.
- 17) KHM. 5. Aufl. (1843), S. 168. KHM 第2版では以下のように表現されている。「その手紙を携え少年は出かけた。しかし道に迷い、日が暮れるとはある大きな森の中へと入り込んだ。真っ暗闇になると彼には灯りが見えた。それを頼りに歩き、その灯りが一軒の小さな家へと導いた。」KHM. 2. Aufl. (1983), S. 108.
- 18) Rölleke (1985): a.a.O., S. 83.
- 19) KHM 第1版第一巻62番にもともと収録されていた。ペローの「青ひげ」の影響を考慮し第2版からは削除される。
- 20) 「そして魔法使いは勢いよくそこを立ち去り、娘を真っ暗な森のその真中にある自分に家へと連れ去った。」KHM. 7. Aufl. (1991), S. 236.
- 21) レレケはフリーデリケ・マンネルを、「フランス語を自由に操り非常に文学的教養の高い女性」と見なす。vgl. Rölleke (1985): a.a.O., S. 70.
- 22) KHM. 7. Aufl. (1991), S. 21.
- 23) ジョン・M・エリス(池田香代子・薩摩竜郎訳)『一つよけいなおとぎ話(グリム神話の解体)』(新曜社)1993年参照。
- 24) KHM. Urfassung (1975), S. 144. (タイトルは「王女と魔法にかけられた王子、かえるの王様」となっている。)
- 25) KHM. 1. Aufl. (1986), S. 1.
- 26) KHM. 2. Aufl. (1983), S. 9.
- 27) KHM. 3. Aufl. (1985), S. 23.
- 28) KHM. Urfassung (1975), S. 246.
- 29) KHM. 1. Aufl. (1986), S. 240.
- 30) KHM. 2. Aufl. (1983), S. 187.
- 31) 1854年に第一巻(A-Biernolke)、1860年に第二巻(Biermorder-D)、1862年に第三巻(E-Forsche)1878年に第四巻が刊行される。Bの項目はヴィルヘルム、それ以外は第四巻の Frucht までヤーコブの手によるものである。
- 32) vgl. Hans-Jörg Uther (Hrg.) (1997): *Ludwig Bechstein. Märchen*. 2 Bde. München.
- 33) 実際グリムは、叙事詩の区切りごとに表れる詩行の繰り返しの構造を、KHM 編

- 集改編の際に意図的に取り入れた。
- 34) vgl. J. Grimm: *Vorrede für Deutsches Wörterbuch*. In: Jacob Grimm: *Kleinere Schriften*. VIII, S. 341. (以下 J. Grimm: KS と略記し、巻数をギリシア数字で記す。)
- 35) Walter Haug (Hrg.) (1995): *Bibliothek des Mittelalters*. Bd. 3. *Deutsche Lyrik des frühen und hohen Mittelalters*. Frankfurt a. M., S. 396f.
- 36) W. Grimm: *Zu Walther von der Vogelweide*. In: W. Grimm KS. III, S. 208-211.
- 37) vgl. W. Grimm: KS. I, S. 523-525.
- 38) W. Grimm: KS. II, S. 385-395.
- 39) ebd., S. 392.
- 40) vgl. W. Grimm: KS. I, S. 523. 森へ狩りに行き、泉の水を飲んでいるジーフリートを、ハゲネが槍で刺殺する。この泉の側には菩提樹が生い茂っていた。相良守峯訳『ニーベルンゲンの歌』前編、1987年、251-273頁参照。
- 41) 拙論：「グリム兄弟における『ニーベルンゲンのもの』と『ドイツ的なもの』」、「九州ドイツ文学」15 (2001)、73-88頁参照。
- 42) W. Grimm: KS. I, S. 139.
- 43) Jacob Grimm: *Vorrede für Deutschen Sagen*. In: J. Grimm: KS. VIII, S. 10.
- 44) s. Anm. 34.
- 45) KHM. 1. Aufl. (1986), S. XVIII.
- 46) ebd.
- 47) J. Grimm: KS. VI, S. 152-191.
- 48) vgl. J. Grimm: KS. IV, S. 14.
- 49) vgl. Ebd., S. 154.
- 50) ebd., S. 158.
- 51) J. Grimm: KS. I, S. 167.
- 52) KHM. 1. Aufl. (1986), S. XIII. 「真のポエジーは、生への連関を抜きには存在しえない。」この「生への連関」という表現は、ヤーコプが『古いドイツの森』序文でも用いている。vgl. J. u. W. Grimm (Hrg.) (1999): *Altdeutsche Wälder*, S. III.
- 53) W. Grimm: KS I, S. 97.
- 54) DW では15、16世紀の用法として、einheimisch werden に「家へとやってくる」nach haus kommen という意味を付している。
- 55) s. Anm. 4.
- 56) J. Grimm: KS. IV, S. 158.
- 57) KHM. 7. Aufl. (1991), S. 20.
- 58) この自然的ポエジー内部の強さもしくは力の概念は、「徳」の意味でもある。
- 59) vgl. J. Grimm: KS. IV, S. 85.
- 60) KHM. 7. Aufl. (1991), S. 20.

- 61) s. Anm. 2.
- 62) zit. nach: Steig (Hrg.) (1904): a.a.O., S. 119.
- 63) 女性名詞の擬人化は、ヤーコプ・グリムの論文によく見られる。また、叙事詩もしくは叙事的ポエジーは「森」だけではなく、「明るい天の青」der helle himmel blau、「緑の木」grünes holz、「新鮮な水」frisches gewässer、「純粋な響き」reiner laut といった自然の事物にもたとえられる。(vgl. J. Grimm: *Gedanken wie sich die Sagen zur Poesie und Geschichte verhalten*. In: J. Grimm: KS. I, S. 399-403.)
- 64) 『パルツィヴァル』におけるジグーネは、「山のふもと」に座っているのみでそこに樹木は登場しない。しかしヤーコプ・グリムは、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの『ティトウレル断片』について研究する中で、ジグーネのいる場所が「菩提樹」や「森」に関連していることを指摘している。(vgl. J. Grimm: KS. VI, S. 116-127.)
- 65) Haug: a.a.O., S. 528.
- 66) Wilhelm Schoof (Hrg.) (1953): *Briefe der Brüder Grimm an Savigny*. Berlin, S. 128.
- 67) Steig (Hrg.) (1904): a.a.O., S. 119.
- 68) Hermann Grimm u. Gustav Hinrichs (Hrg.) (1963): *Briefwechsel zwischen Jacob und Wilhelm Grimm aus der Jugendzeit*. Weimar, S. 49.

テキスト

Grimm, Brüder: *Kinder- und Hausmärchen*. 1. Aufl. Bd. 1. Berlin 1812, Bd. 2. Berlin 1815 (Nachgedruckt u. hrg. v. Heinz Rölleke u. a. Göttingen 1986); 2. Aufl. Berlin 1819 (nachgedruckt u. hrg. v. Heinz Rölleke. Köln 1983); 3. Aufl. Berlin 1837 (nachgedruckt u. hrg. v. Heinz Rölleke. Frankfurt a. M. 1985); 4. Aufl. Göttingen 1840; 5. Aufl. Göttingen 1843; 6. Aufl. Göttingen 1850; 7. Aufl. Göttingen 1857 (nachgedruckt u. hrg. v. Heinz Rölleke. Stuttgart 1991), (nachgedruckt u. hrg. v. Hans-Jörg Uther. München 1996).

Rölleke, Heinz (Hrg.) (1975): *Die älteste Märchensammlung der Brüder Grimm. Synopse der handschriften Urfassung von 1810 und der Erstdrucke von 1812*. Genève.

参考文献

- De Boor, Hermut (Hrg.) (²²1988): *Das Nibelungen Lied*. Mannheim.
- Denecke, Ludwig u. Teitge, Irmgard (Hrg.) (1989): *Die Bibliothek der Brüder Grimm*. Weimar.
- Gerstner, Hermann (⁹1997): *Brüder Grimm*. Hamburg.

- Grimm, Brüder (1994): *Deutsche Sagen*. Cassel 1816. Nachgedruckt Frankfurt a. M.
- Grimm, Hermann u. Hinrichs, Gustav (Hrg.) (1963): *Briefwechsel zwischen Jacob und Wilhelm Grimm aus der Jugendzeit*. Weimar.
- Grimm, Jacob (1965): *Kleinere Schriften* 8 Bde. Berlin 1864-66. Nachgedruckt Hildesheim.
- Grimm, Jacob (1992): *Deutsche Mythologie* 3 Bde. Göttingen 1835. Nachgedruckt Wiesbaden.
- Grimm, Jacob (1840-78): *Weisthümer*. 7 Bde. Göttingen.
- Grimm, Jacob (1922): *Deutsche Rechtsaltertümer*. 2 Bde. Leipzig.
- Grimm, Jacob u. Wilhelm (Hrg.) (1999): *Altdeutsche Wälder* 3 Bde. Cassel 1813, Frankfurt a. M. 1815-16. Neuedruckt u. hrg. v. Otfried Ehrismann. Hildesheim / Zürich / New York.
- Grimm, Jacob u. Wilhelm (Hrg.) (1999): *Deutsches Wörterbuch von Jacob und Wilhelm Grimm*. 33 Bde. Leipzig. 1854-1971. Nachgedruckt München.
- Grimm, Wilhelm (1992): *Kleinere Schriften*. 4 Bde. Berlin 1881-83. Nachgedruckt Hildesheim / Zürich / New York.
- Harrison, Robert Pogue (1992): *Wälder. Ursprung und Spiegel der Kultur*. Übers. v. Martin Pfeiffer. München / Wien.
- Hasel, Karl (1985): *Forstgeschichte. Ein Grundriß für Studium und Praxis*. Hamburg / Berlin.
- Haug, Walter (Hrg.) (1995): *Bibliothek des Mittelalters*. Bd. 3. *Deutsche Lyrik des frühen und hohen Mittelalters*. Frankfurt a. M.
- Rölleke, Heinz (1975): *Die ‚stockhessischen‘ Märchen der ‚alten Marie‘. Das Ende eines Mythos um die frühesten KHM-Aufzeichnungen der Brüder Grimm*. In: *Germanisch-Romanische Monatsschrift NF*. 25. Hf. 1, S. 74-86
- Rölleke, Heinz (1985): *Die Märchen der Brüder Grimm*. München / Zürich.
- Rölleke, Heinz (Hrg.) (2001): *Briefwechsel zwischen Jacob und Wilhelm Grimm*. Text 1. Stuttgart.
- Schoof, Wilhelm (Hrg.) (1953): *Briefe der Brüder Grimm an Savigny. Aus dem Savignyschen Nachlass*. Berlin.
- Schoof, Wilhelm (1999): *Die „Altdeutsche Wälder“ der Brüder Grimm*. In: *Altdeutsche Wälder* Bd.1. Hrg. v. Otfried Ehrismann. Hildesheim / Zürich / New York.
- Steig, Reihold (1970): *Achim von Arnim und Jacob und Wilhelm Grimm*. Stuttgart / Berlin 1904. Nachgedruckt Bern.
- Uther, Hans-Jörg (Hrg.) (1997): *Ludwig Bechstein. Märchen*. 2 Bde. München.
- Zacher, Julius (Hrg.) (1870): *Briefwechsel über das Nibelungenlied von C. Lachmann und Wilhelm Grimm*. In: *ZfdPh*. 2, S. 193-215, 342-365, 514-528.

- Zipes, Jack (1989): *The Brothers Grimm. From Enchanted Forests to the Modern World*. New York.
- 大野寿子「グリム・メルヘンと通過儀礼 — 森に表れる死と再生の図式 —」、「九州ドイツ文学」10 (1996)、38-61頁。
- 大野寿子「ことばの活性と生の連続性 — 『古いドイツの森』序文に見るヤーコプ・グリムのポエジー観」、「西日本ドイツ文学」13 (2001)、9-19頁。
- 大野寿子「グリム兄弟における『ニーベルンゲン的なもの』と『ドイツ的なもの』」、「九州ドイツ文学」15 (2001)、73-88頁。
- 小澤俊夫 (他) 編訳『グリム兄弟』、国書刊行会、1989年。
- 相良守峯訳『ニーベルンゲンの歌』、岩波文庫、³1987年。
- 谷口幸男 (他)『現代に生きるグリム』、岩波書店、1985年。
- ジョン・M・エリス (池田香代子・薩摩竜郎訳)『一つよけいなおとぎ話 (グリム神話の解体)』、新曜社、1993年。
- カール・ハーゼル (山縣光晶訳)『森が語るドイツの歴史』、築地書館、1996年。
- ロバート・P・ハリソン (金利光訳)『森の記憶 — ヨーロッパ文明の影』、工作舎、1996年。

Die Idee des Waldes bei den Brüdern Grimm

Hisako ONO

In der bisherigen Forschung der *Kinder- und Hausmärchen* (KHM) – besonders nach der Dekonstruktion des Mythos der mundartgetreuen Märchenaufzeichnungen der Brüder Grimm (von Heinz Rölleke) – bilden vor allem die kontinuierlichen Textumschreibungen durch Wilhelm Grimm sowie mögliche französische Einflüsse durch die Hugenotten die Hauptgegenstände der meisten Kritiken. Es kann zwar einerseits wie ein Widerspruch gegen die Grundprinzipien der KHM aussehen, wenn die Brüder Grimm „aus eigenen Mitteln nichts hinzugesetzt“ und die Erzählungen mit verdächtig „fremden Ursprung“ ausgeschieden haben (Vorrede von KHM. 2.Aufl. In: KHM. 7.Aufl. 21). Im Hintergrund des Umarbeitungsprozesses und der Auswahlkriterien der KHM scheinen aber andererseits die sogenannte Begriffsverschiedenheit „des Einheimischen“ zwischen den Brüdern Grimm und ihr eigenes Bild „des Natürlichen“, „des Poetischen“ und „des Altertümlichen“ zu existieren. Dabei spielt der Begriff des „Waldes“ eine große Rolle. Dieser Aufsatz hat den Zweck zu präzisieren, dass das mit den untergehenden „Wäldern“ verglichene Naturpoesiebild bei Jacob Grimm und das „einheimisch“ gewordene Kunstpoesiebild bei Wilhelm Grimm im Hintergrund der Umstilisierung der KHM und ihres wissenschaftlichen Lebens als eine Idee existieren.

In 96 der insgesamt 200 Erzählungen (außer der Kinderlegenden) der KHM (7.Aufl.) kommen Darstellungen von Wäldern vor, die durch die Umschreibungsprozesse ergänzt (KHM 5, 29, 46) und dadurch immer detaillierter wurden (z.B. KHM 1, 53 usw.). Merkwürdigerweise benutzten die Brüder Grimm in den KHM das Wort „Forst“ nie, während in *Ludwig Bechsteins Märchenbuch* (1853) „Wald“ und „Forst“ manchmal vermischt benutzt wird. In dem *Deutsche [n] Wörterbuch von Jacob Grimm und Wilhelm Grimm* (DW) trug Jacob selbst unter das Stichwort „Forst“ ein, dass der „aber nicht jeder wald, sondern bannwald, herrnwald, fronwald, im gegensatz zur mark, dem allen genossen gemeinen wald“ ist. So könnte man sagen, dass die Brüder Grimm das Wort „Wald“ als einen volksgemeinsamen Ort benutzten. „Forst“ dagegen benutzten sie als einen Gegen- bzw. Oberbegriff.

Auf die mannigfaltigen Wald- bzw. Naturschilderungen in den KHM und ihre Umstilisierung lässt sich die Verherrlichung der altdeutschen Dichtungen der Brüder Grimm projizieren. „Wald“, „Brunnen“ und „Linde“ z.B. in *Der Froschkönig oder der eiserne Heinrich* (KHM 1) sind zwar als sogenannte Triade des Schicksalsraums zu betrachten, aber „eine alte Linde“ wurde erst in der 3. Auflage von Wilhelm Grimm ergänzt. Es bezieht sich erstens auf den Wald

mit der Linde als Topos der Liebe in der mittelhochdeutschen Dichtung, z.B. *Under den linden* von Walter von der Vogelweide und zweitens auf den Brunnen unter der Linde (in der Heide) neben dem Walde als Ermordungsstätte von Siegfried im *Nibelungenlied* bzw. in der deutschen Version von Siegfried als Drachentöter (vgl. W. Grimm KS. I. 138f., 524f). Diese Umarbeitung der KHM kann auch als ein Versuch des mehr poetischen denn historischen Wiedergebens des einerseits altertümlichen andererseits geistig-kontinuierlichen Lebens in den sehnsüchtig vorzüglichen Natur- bzw. Nationalpoesien betrachtet werden.

Die Märchen, die „von Reimen und Versen unterbrochen werden“, sah Wilhelm Grimm als „die ältesten und besten“ an, auch wenn sie deutsch oder nicht deutsch wären (vgl. W. Grimm KS. I, 326f). Er verglich diesen „epischen“ Grund der Volksdichtung mit „dem Grün“, das sich durch die ganze Natur in mannigfachen Abstufungen verbreitete“ (KHM. 7.Aufl., 20). Jacob Grimm führte auch als ein Beispiel der Poesie im altdeutschen Recht Reime und Alliterationen an und erklärte, dass „das poetische“ von „dem wunderbaren“ und „dem glaubreichen“ konstruiert werden soll (vgl. J.Grimm KS. VI, 154ff). Das Wesen der Poesie, also „die fülle von sprachlebendigkeit“ habe sich zwischen der Ursprache und den heutigen Mundarten bewegt, und die epische Poesie trage einen doppelten Teil an sich: „einen göttlichen und menschlichen“ (a.a.O., IV, 84f.). Er betrachtete „das Poetische“ als ein Mittel zwischen dem Ursprünglichen und dem Gegenwärtigen, das schon von Anfang der Geschichte an „einheimisch“ im Leben existieren sollte. Der Begriff „einheimisch“ steht bei Jacob Grimm als „domesticus“, „vernaculus“ und „intestinalis“ streng gegenüber „dem Ausländischen“ (vgl. DW.), während Wilhelm Grimm den „einheimisch“ werdenden Prozess von Naturpoesie bis zum Kunstpoesie, also die einheimisch gewordene Kunstpoesie für historisch unvermeidlich hielt. Man kann daher die Umarbeitung der KHM mit folgenden drei Punkten zusammenfassen:

1. Die Brüder Grimm sammelten – und besonders Wilhelm bearbeitete – die KHM mit Treue zum Altertümlichen bzw. zur altdeutschen Poesie, die wiederbelebt werden sollte.
2. Das Altertümliche ist universal und überzeitlich, deshalb kann es in allen Völkern und in allen Zeiten als Einheimisches erscheinen.
3. Die Erzählungen von fremder Herkunft können auch als einheimisch im Sinne Wilhelm Grimms verstanden werden, insofern die Lebensgrundlage des Erzählenden schon auf dem deutschen Boden liegt.

Mit dem „Wald“, der immer mehr abgeholzt wird und der schon aufgeforstet werden muss, verglich Jacob Grimm die untergehende Naturpoesie (im Brief an Arnim, 20.05.1811), die alte Geschichte (im Brief an Savigny, 26.12.1811) und die jugendliche Reinheit: „Die einzige Zeit, in der es möglich wäre, eine Idee der Vorzeit, wenn Du willst der Ritterwelt, in uns frisch

aufgehen zu lassen, (...) wird jetzt gewöhnlich in den Wald verwandelt, in dem wilde Tiere herumgehen“ (im Brief an Wilhelm, 18.04.1805). Der Unterschied in der Begrifflichkeit vom „Einheimischen“ zwischen Jacob und Wilhelm Grimm kann man symbolisch schon im oben genannten Ideenunterschied wie „Idee der Vorzeit“ (bei Jacob) und die „der Ritterwelt“ (bei Wilhelm) erkennen, die auf jeden Fall mit dem Wald verglichen wurde. Am Anfang des 19. Jahrhunderts, als die Brüder Grimm die mündlich tradierte Volksliteratur gesammelt haben, gab es, forstwissenschaftlich gesehen, in Deutschland kaum mehr ausgedehnte Wälder, sondern zahlreiche abgeholzte Einöden oder teilweise aufgeforstete junge Waldstücke. Für die Brüder Grimm, die den Lauf der Zeit manchmal als „wachsen“ oder „fortpflanzen“ bezeichneten, und die die eigene Forschung als Botanik betrachteten, musste diese reale Abwesenheit des „Grüns“, dem der epische Grund der Volksdichtung glich, durch das ideale, poetische und geistig kontinuierliche Waldbild ersetzt werden. Genau darin lässt sich eine Motivation der Brüder Grimm für die Sammlung und Umstilisierung der KHM finden.